

ある日診察室で……

田 中 一 之

息子の看病つかれでっしゅか？

永かった冬もやっと終りをづけ、春らしい陽の光がさす私の診察室……

「私は夫を結核でなくし、二カ月前息子も同じ結核で死にました。息子は菌が出ていたというのですが、つききりで看病してはいたので、私もひっこすっちやおりませんとか、みてくだはりませ。」と、六十過ぎのおばあさんが診察室を訪れた。形の如く診察して見ると、右の肩が心持ちうすく下つていて、聴診では、呼吸音が少し弱い。

しかし結核は外からだけでは判らない。レントゲン写真をとって見ると、右胸の上三分の一がおかされ、うづらの卵大の空洞が二三個ある。

犯人はこれだ。

「おばあさん、落着いて聞いて下さいよ。心配なさっていたとおり、あなたも、亡くなったご主人や息子さんと同じ結核にかかっています。自分で身体がきついか、咳が出るのかということがありますか。」

「はい、え。あ、た、そぎゃんこつあ、いっちよんあるまっせんでしたばい。ばってん看病疲れからでっしゅか、息子がはっててから、ちったあ身体のだらしかごつござるます。」

「さうですか。この病気は、かゝつても自分では全然わからないのが特徴ですよ。」

病気と自分の体力が釣り合っている間は、何ともないことが多いのですが、風邪をひいていつまでもなおらないとか、ひどい仕事が続いたり、心配事がつづいたりして、体力が衰えてくると、病気が表に出てくるのです。

それまでに一年かゝることも、二年かゝることもありますが、何年前にかゝつたかわかりにくいものですよ。」

肺病すじ、ていいますばってん……

「それぢや、私のはいつ頃かゝつたでっしゅか。息子が寝込んでから、足かけ四年位なりますばってん。」

「はつきりいつとは言えませんが、あなたががゝつたのと、息子さんががゝつたのと、どちらが早かつたかわかりませぬ。」



年をとってからの結核は、割りに合い進みにくいものですが、若い時の結核はほとんど進むことがあります。

「先生、肺病すじ、ていいますばってん……」

「先生、肺病すじ、ていいますばってん……」

すばってん……うちのごたつとが肺病すじ、でっしゅか。」

「親子代々、同じ病気が出ると、すじ」と言いますが、言い廻しによつては、結核もすじを引くと言えるかも知れません。それは、結核にかゝり易いというか、抵抗力がでにくい体質が遺伝します。それに、結核にかゝつた人、殊に菌を出している人が居ると家族の人は菌を吸い込む機会が多くなります。それで同じ家の中に、次からつぎへと結核患者が出てくるわけですよ。」

「息子も、はよう先生に診察してもらえばよかつたか。」

「そうですね。もしご主人が健康診断をされていたら、息子さんの病気も早く発見できて、こんなことにはならなかつたかも知れませぬ。ただ、おばあちゃんの病気ですな。」

「息子も、はよう先生に診察してもらえばよかつたか。」

「息子も、はよう先生に診察してもらえばよかつたか。」

「息子も、はよう先生に診察してもらえばよかつたか。」

もまだ片一方で三分の一位だし今まで治療をしてないので十分効果がありますよ。もう大丈夫だと言うまで、徹底して治療を続けて下さいよ。もう何ともなくなつたからとか、元気が出てきたからといったも、その時はやつと病気が体力の釣り合いが取れてきたところだから一番大切な時期です。こゝで一押し、二押しして、病気を土俵の外まで押し出してしまわないと、油断しているときに、うっちゃりをくわなないと限りませぬからね。」

それから、息子さんには奥さんや子供さんはありませんか。」

「はい、嫁と学校に行かない子供が二人居ます。」

「学校に行っている子供は学校で、毎年一回、健康診断をしますけど、学校に行っていない子供さんや、家庭に居る奥さん達は役場が年に一度は健康診断をしています。できるだけ早く保健所に行つて健康診断を受けて下さいよ。おばあちゃんの苦しみをくり返さないようにお。」

こうして、自分の治療と、孫たちの健康診断を約束して帰つて行くおばあちゃんの肩には、春の日ざしが暖かく照つていた。

(結核予防会 熊本県支部医師)



中卒生の就職問題を考える

娘一人ムコ四人

若い人々をのせた就職列車が、熊本駅を出發するのはもうすぐ……県外に流れ出る中卒生と、県内の求人側と……

あいかわらずの求人難

このところ、各産業とも人手不足の話がにぎやかである。

この三月に中学校を卒業する者を雇おうとする場合は、まっさきに「求人難」の壁に突きあたつたわけである。

もうすでに、激しい求人対策で、どうにか人を確保している企業体もあれば、まだ求人メドもつかないという事業所もある。一方では、中高年令者や炭鉱離職者の雇用促進が、声を大にして叫ばれ、この方々の雇用問題は、新規学校卒業生の労働市場が、ほぼ完全な「売り市場」であるのに引きかえ、一方的な「買手市場」であることは、極めて皮肉な現象であるとともに、我が国の労働力需給のアンバランスを示す深刻な問題として考えさせられる。

本県でも、中小零細企業における人手不足は、年々

昭和三十七年三月の新規中学校卒業生は、政府の経済刺激策の影響で、石炭産業をのぞけば、すべての産業で未曾有の求人ブームをまき起し、県内外ともに、相当多数の人手が不足した。従つて、この三月の中学校卒業生に対する求人も、依然として強気であった。

三月の中学校卒業生数は戦後最高といわれ、求人難もいくぶん緩和されるだろうと思われたが、進学希望者がふえているので、前年度同様の求人難である。

県内の事業主は考えよう

とところで、問題は「県内求人」である。これについては特に「地元優先」の立場から、適正な求人求職の結びつきが行なわれるよう特に配慮してきた。しかしながら、県内でも人を雇うこと

女一万七千九百九十九名で県外就職希望者四千四百五名に対し、四・四倍。これを男女合わせると四・〇倍となり

男一千五百七十二名で、県内就職希望者九百一十一名に対し一・七倍、女一千五百二十三名で就職希望者一千三百五十三名に対し一・一倍

これを男女合わせると一・四倍になっている。

「県内」の場合は、この数字だけでは「求人難」とは考えられないが、本県の場合、県外との雇用条件の格差等のため、求人者も雇用についてあきらめ的な考え方もあり、求人者の出足が遅かつたのが目立っている。